

(追記)

成稿後、東京大学の石井進氏から本木簡の記載内容について御教示を賜った。釈文そのものの解釈にも関わるため、その要点を略述する。

一、野稻(のいね)の用例は「入来文書」中にあり、鎌倉期まで遡らせることが可能であろう。

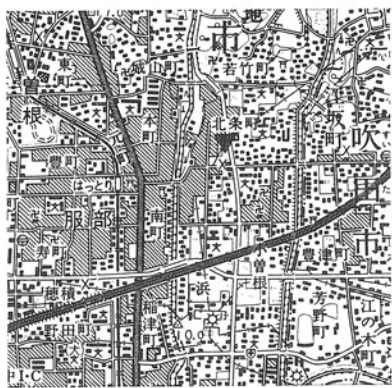
二、「加せ□」は「加せう」と判読できる可能性が高い。このうち「加せう」について、筆者個人としては調査地の南西約3kmの泉南郡田尻町内に「嘉祥寺(かしょうじ)」の地名が現在も残っており、「かせうじ」を略記したのではないかと考えている。

(重金 誠)

大阪・小曾根遺跡

- 1 所在地 大阪府豊中市北条町一丁目
- 2 調査期間 一九八九年(平一)一月～六月
- 3 発掘機関 豊中市教育委員会
- 4 調査担当者 森 幸三
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

小曾根遺跡は豊中市の南部の天竺川・高川に挟まれた標高約4m前後の低地平野部に位置する。弥生時代から室町時代にかけての複



(大阪西北部)

合遺跡であり、また文治五年(一一八九)の「春日社領垂水西御牧榎坂郷田畠取帳」に当時の様子が記されている。

今回の調査は共同住宅建設に伴い実施された小曾根遺跡第一五次調査で、弥生時代中期の竪穴式住居・壺

棺墓、平安時代末から鎌倉時代前半の掘立柱建物・木棺墓・井戸、室町時代の溝等が多量の土器・石器・木器などの遺物を伴い検出された。

木簡は井戸より出土した。井戸は直径一・五m、深さ一mを測り、井筒として直径五〇cm、高さ三五cmの二段積の曲物が底に据えられていた。掘形の形態から、井戸枠・井桁等が存在していた可能性も考えられる。木簡は曲物内埋土から一点、井戸を廃棄したと考えられる上部の埋土から二点出土した。木簡の他に「十」の墨書のある瓦器碗や竈片が出土しており、これから一三世紀初頭頃には廃絶した井戸と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「＜蘇民将来子孫宅也＞」

170×32×3 032

出土した木簡は三点とも同文であり、蘇民将来の名を記した呪符木簡である。おそらく同一人の筆になるものと思われる。隣接地で



行われた小曽根遺跡第七次調査でも、「蘇民将来□□□□」の木簡が出土しており、この集落において「蘇民将来」に関する信仰が根強いものであったと考えられる。

9 関係文献

木簡学会『木簡研究』四号（一九八二年）

（森 幸三）

兵庫県教育委員会編

『山垣遺跡―兵庫県文化財調査報告書第七五冊―』

一九八三年に調査され、出土した木簡の内容から、丹波国水上郡春部里に関わる遺跡と推定されている山垣遺跡の正報告書。二一点の木簡全点について、写真、実測図、釈文が掲載されている。

A4判、図版五九枚、本文八八頁、頒価一五〇〇円・送料

三一〇円、兵庫県教育委員会 一九九〇年三月刊行

申込先・兵庫県水上郡春日町黒井四九六の二

春日町歴史民俗資料館

TEL 〇七九五（七四）〇二二五